

追悼・遠山一行先生

(IAML 日本支部初代支部長・支部名誉会員)

遠山一行さんを悼む	皆川達夫	1
遠山先生の思い出	村井範子	3
遠山一行先生の訃報に接して	金澤正剛	4
首尾一貫	松下 鈞	6
遠山邸	岸本宏子	8
IAML と郷土音楽資料館～日本近代音楽館～	平尾行蔵	9
遠山一行記念日本近代音楽館	樋口隆一	10
遠山先生と音楽資料館	林 淑 姫	12
遠山一行先生年譜・著作一覧		14



撮影・飯島幸永

遠山一行さんを悼む

皆川 達夫

昨 2014 年 12 月 10 日、遠山一行さんは 92 歳でこの世を去られました。

遠山さんのお名前は、まず第一に音楽評論家として知られています。とくに『毎日新聞』や『読売新聞』の音楽欄に長年にわたって健筆を振るわれ、その明晰かつ洞察力ある文章は、他の追従を許さぬものがありました。旧制府立高等学校在学時代から小林秀雄の深い影響を受けられ、加えてその鋭敏な感性によって独自の文体を練りあげてこられたのです。『音楽の友』や『音楽芸術』などの音楽雑誌にも多数の文章を寄せられ、後に

『遠山一行著作集』として全 6 巻が新潮社より刊行されております。そのような批評活動は、やがて桐朋学園大学学長や東京文化会館館長といった文化行政面でのご活動にまで拡大されてゆくことになりました。

さらに、「日本近代音楽館」の創設者としての遠山一行さんの貢献を忘れることが出来ません。山田耕筰、武満徹、三善晃などの近代日本の代表的な作曲家たちの自筆楽譜のほとんどを収集し保管する音楽史料館を設立されたのです。本来この種の施設は国家ないしはそれに準じる公的機関がなすべき筈のところを、遠山さんは私財を投じてそれを果たされたのでした。

音楽史を専攻するわたくしは、旧制府立高校における遠山さんの 5 年後輩というご縁か

ら、「日本近代音楽館」およびその前身の「遠山音楽図書館」の副館長として、史料収集業務を一任されました。ご自分が設立された史料館なのですが、任せるとなると徹底的に信頼され、すべてを任せてくださった度量のひろさには、いま思い出してみても恐縮し、かつふかい感銘を覚えます。

たとえば毎月1回ずつ開かれる定例史料委員会の席上、しゃべっているのはほとんどわたくしで、遠山さんが干渉がましく、あるいは命令がましく発言されることは一切ありませんでした。そのおかげで、わたくしは欧米留学時代に身につけた「音楽史料館はかくあるべし」という信条を最後まで貫くことが出来たのです。言うまでもなく、それには平尾行藏さん、林淑姫さんをはじめ有能な司書たちの支えがあってこそこのことです。

実は、「音楽評論家」としての遠山さんは、わたくしが専門とする音楽の学問的ないしは実証的研究にかんして必ずしも同意見ではあられませんでした。二人だけの時には「音楽評論」と「音楽学」とをめぐって、かなり激しく厳しい意見の対立があったのですが、さて史料収集事業となると、わたくしの立場を全面的に支持してくださいました。

長者の徳と申しましょうか、上に立つ者の度量と言いましょうか、誰もが真似できない姿勢をおのずと身に付けておられたことに、感動させられた場面が何回もあります。

最近になって「日本近代音楽館」の維持が、もはや個人事業の限界を越えると見極められると、しかるべき公的機関ないしは大学図書館への移管を考えるようになられました。そのご相談を受けて樋口隆一さんの協力を得、幸い「日本近代音楽館」は無事に明治学院大学へ移管されることとなりました。数十年に



シャルトル大聖堂前にて
筆者(右)とともに
(1963)

わたって私財を投じて営々と築いてこられた膨大なコレクション、国家的音楽文化遺産というべきものを、一切の条件なしに即決され、明治学院大学に委譲されたことにはただただ頭のさがる思いです。

個人的な思い出は、ご一緒した槍ヶ岳登頂やらヨーロッパ自動車旅行やら多々あって、書き綴ってゆけば一冊の本になるに相違ありません。ただし今となってみますと、遠山さんと三善晃君という、旧制府立高校出身の音楽界の偉大な先輩と後輩の間にとり残されたわたくしは、ただただ茫然たる思いであります。

ここに遠山一行さんと三善晃君御両所の御魂の平安を、心より祈り上げる次第であります。

(立教大学名誉教授・国際音楽学会名誉会員)

遠山一行先生の思い出

村井 範子

遠山一行先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

先生にはじめてお目にかかったのは、前世紀なかばのことでした。

私は成城に住んで居りましたが、すぐご近所のピアニストの先生が東京芸術大学音楽部への受験をお勧めくださいました、すぐ連れて行ってあげようと、先生自らと一緒に遠山一行先生にお会いしに行きました。その後、入学試験も済んで私は東京芸術大学音楽学部楽理科の一年生になりました。

遠山一行先生の音楽学の講義を二年間受けることができました。はじめて「音楽史」というものの講義に接したわけです。

ピアノを八歳頃から習っていた私は、遠山先生がお書きになっていた音楽評論を新聞や雑誌でよく読んでおりました。芸大生となつてうかがった先生の音楽史の講義は毎回印象的なものでした。音楽の世界の大きさ、広さを知らせて下さいました。

遠山先生が執筆なさる新聞や雑誌など著作物は大変な数にのぼると思います。私どもは、それを大切に読ませていただいてまいりました。先生に、芸大一年生として「音楽史」の講義を受けたときの気持ちで今日まで先生の著作物を読ませていただいてきました。

先生はとても多忙でいらっしゃるのに時にはお宅や図書館でごいっしょにお茶を楽しむこともして下さいました。アメリカのハーバード大学音楽部のジョン・ウォード教授を遠山図書館にご案内したときも、気楽に図書館の一部に在るお部屋で、関係者の数人でお茶を楽しみました。気楽な雰囲気でお茶を飲みました。



IAML1988 東京会議フェアウェル・パーティにて
左は Maria Calderisi 会長 (1988.9.9 榎山荘)

あなたにもお話します。

遠山先生は、遠山図書館を IAML のメンバーにして下さって、みずから IAML の日本支部の支部長を務めてくださいました。

私のささやかな経験ですが、「音楽学」を学ぶには、じつに図書がたくさん必要です。それが遠山図書館の大切な存在理由です。

かつてたまたまドイツに行ったとき、イタリアのボローニアで図書館の大会を開いていたので、行ってみました。これが、はじめての IAML (国際音楽資料情報協会) でした。とても素晴らしい音楽資料の交流の会であること、その規模の大きさに驚きました。それは、図書館と図書館をつなぐという国際会議だったのです。その後、その大会がフランスのパリで開かれたとき、日本から数名、遠山先生もご出席くださって、よい集まりとなりました。遠山先生はこの団体 IAML の日本支部長におなりくださって、世界の音楽図書館とのつながりを大切にしてくださいました。世界の音楽図書館との本格的な交流が出来たのです。素晴らしいことでした。

遠山先生は晩年をおむかえになって、日本近代音楽館の楽譜や書籍類を明治学院大学に寄付なさることになりました。その贈呈式が

ありました。先生の弟子として、松前紀男さんと私も式典に招かれました。明治学院大学からは、先生に「博士号」をおあたえになりました。あたたかい雰囲気のうちにもおごそかに式は進められ、先生からは長い年月に集められた貴重な図書が明治学院大学に寄贈されました。これから又、多くの人々のお役に立つことでしょう。式が終り、私は松前さんとともに、先生にご挨拶に行きました。会場の外に出て、お別れのご挨拶をしました。最後に先生は「あくしゅ」をしてくださいました。びっくりしました。いつもよく先生にお会いしていたのに、「あくしゅ」は初めてでした。帰途の車の中で松前さんと、先生が「あくしゅ」をしていただいた感動を語り合いました。遠山先生「あくしゅ」ありがとうございました。わたしどもは、ふだんの生活でほとんどないことなので、おどろきました。そしてこれが遠山先生との最後にお会いしたことになりました。

遠山先生のご冥福を、心よりお祈り申し上げます。先生、長い間、いろいろお教えいただきありがとうございました。

(フェリス女学院大学名誉教授)

「最後にひとこと」

遠山先生の弟子である松前、佐藤、村井の3人は「音楽史」という一冊の本の必要性を直感し、当時若手の秋岡陽さんのご助力もいただいて、ミラー教授「音楽史」を翻訳しました。人々は音楽史の本を必要としていたのでしょうか、最近 16 万部のロングセラーになったことが報告されました。遠山先生の弟子たちの著作物です。

遠山一行先生の訃報に接して

金澤 正剛

遠山一行先生の訃報に接し、覚悟はしていたものの、自分の重要な支え柱の一つを失ったような気がした。私は先生に師事したこともなく、先生の著作全集を持つてはいるものの、その全部を読み通したわけではない。にもかかわらずこれほどまでの気持ちを味わうのは、折に触れて公私でいろいろとお世話になったためである。

今から半世紀前のことになるが、私がハーバード大学から博士の学位を得た際、そのままアメリカに留まるのか、日本に帰国するのか、大いに迷った。そのひとつの問題は、ヨーロッパ音楽の資料や参考文献に乏しい日本に戻っても、やりたい研究を続けることが出来るだろうかということであった。結局覚悟を決めて帰国した時、ハーバードで同じクラスで机を並べたことのある村井範子さんが、最初に紹介して下さったのが遠山一行先生であった。初対面の私が長年日本を留守にしていたことを知って、先生は当時の日本における音楽学研究の現状を極めて明解に説明して下さい。さらに研究を続けるのなら、「私の蔵書を遠慮なく使って下さい」とも言われた。ちょうどその頃先生の新しい邸宅が完成し、真向いの元のお宅で蔵書を整理して、「遠山音楽図書館」を開こうとおられた時のことであった。以後私は頻りに遠山図書館を訪れて、ルネサンス音楽に関する自分の研究を続けることが出来た。中世、ルネサンス音楽と、現代フランス音楽の資料に関しては、欧米の大学図書館にも匹敵する充実した蔵書のおかげで、その後も思うがまま研究を続けることが出来たと今でも深く感謝している。先生とは学会を通じても親しくつき合わせていただいたが、先生がその設立に尽力され、16年にわたって初代日本支部長を務

められた IAML 日本支部の支部長を、私も務めさせていただいたことは特に忘れ難い経験であった。

ここで恐縮ながら私事に関して言うことをお許し願いたいですが、私が妻千鶴子と初めて出会ったのも、遠山家においてであった。それまでの妻と私は外国生活が長いという共通点はあったものの、妻の第二の故郷はフランス、私はアメリカとイタリアということで、まったく接点を持っていなかった。ところがわれわれ二人の両方を知っているという方々が何人か居られて、あの二人を会わせてみたらうまくいくのではないかという話になったらしい。ある時先生から夕食に招かれて、パーティーに行くつもりで遠山家に伺ったところ、そこに千鶴子が居た。しかも他には誰も居なかったの、なるほどそういうことだったのかと納得し、そのまま筋書き通りにつき合うこととなった。振り返ってみる時、相手がどう思ったのかは分からないが、私自身は初対面とは思えず、以前からの知り合いであるかの如くつき合うようになったように思う。従ってプロポーズの言葉もなく、気がついたらば婚礼の手筈やスケジュールを話し合っていたように思う。後に慶子夫人から「絶対うまくいくと思った」と言われて、周囲の目の高さから敬服した次第である。そこでわれわれは遠山ご夫妻に花嫁側の仲人をお願いすることとした。一方花婿側の仲人は、私がケンブリッジでの初めの一年間に親しくしていただいた慶応義塾大学教授の村井実、範子ご夫妻であった。村井ご夫妻が留学一年目の私の貧乏学生生活をそれとなく支えてくださったことは、今なお心から感謝している。一方遠山先生のご子息二人とは、私が頻繁に遠山図書館に通っていた時に偶然お目にかかる機会もあり、両君の学生時代からのお付き合いであるが、特にご長男の公一君とは美術史と音楽史という違いはあるものの、同じルネサンス研究の仲間としても、



遠山音楽財団附属図書館開館 (1969.11.1)
(左より) 平島正郎、遠山一行、皆川達夫

親しくしていただいた。特に我々二人の共通点として、ルネサンス芸術の研究所として名高いフィレンツェのヴィッラ・イ・タッティ、正式にはハーバード大学ルネサンス研究所のメンバーとして仕事をしたことを忘れるわけにはいかない。残念ながら二人揃って研究所を訪れたことはないの、いつの日かそんな機会に恵まれると良いな、その時には先生ご夫妻を案内して、などと勝手に夢見たこともあるが、それも果たせぬままとなってしまったことは誠に残念である。

それやこれやで、遠山先生に関する思い出はまだまだ尽きないが、今でもなお、先生にご相談したいことがあると、どこかその辺に居られて、気軽に顔を出してくださるような気がしてならない。振り返ってみるとき、もっと先生にお会いする機会を持つ努力をしておけば良かったと悔やまれるところでもある。妻千鶴子とともに、心からご冥福をお祈りしたい。

(国際基督教大学名誉教授)

首尾一貫

松下 鈞

蕎麦を食べる度に遠山先生のことを思い出します。東京文化会館の館長室を訪問して音楽図書館協議会 (MLAJ) のこと、近代音楽館を設立する会のこと、国立音楽殿堂 (仮称) のことなどあれこれ相談申し上げた後、コンサートの始まりにはちょっと時間があるという時には池之端藪蕎麦にご一緒させていただくことが何回かありました。遠山先生は、いそゆきそばと天ぷらそばを注文され、その組み合わせはいつも変わりませんでした。

遠山先生に初めてお目にかかったのは、1966 年の秋、中世音楽合唱団の練習場になっていた広尾の遠山音楽図書館でした。その時はうかつにも音楽評論家の遠山一行氏と音楽図書館との繋がりに気づきませんでした。1971 年 6 月 14 日、日本近代文学館に開設されていた南葵音楽文庫で開催された「音楽図書館の相互交流について検討する会合」に遠山先生は遠山音楽図書館の館長として出席され、消極的な意見を述べる出席者もおられた中、音楽図書館の相互協力の必要性和ゆるやかな運営組織の設立に賛成の意見を述べてくださいました。この会合からさほど時を経ずして MLAJ は設立されました。遠山先生は、1978 年 5 月 20 日から 1985 年 6 月 1 日まで変則的に 3 期半の 7 年の長きにわたって理事長を務めてくださいました。任期中、MLAJ の最高決議機関を総会とする等の抜本的な規約改定が行われ、また、次世代を担う若いスタッフを対象とした月例の長期研修会が実施されました。

遠山先生の理事長時代、MLAJ は国際的活動への積極的参加に舵を切りました。1979

年 7 月、IAML (国際音楽資料情報協会、当初は国際音楽文献学協会) 日本支部の創設への関与、1982 年 7 月、IFLA (国際図書館連盟) 1986 東京大会準備委員会への参加、1983 年 9 月、IMC (国際音楽評議会) 日本国内委員会への参加などです。こうした国際的活動への地ならしが、その後の IAML1988 東京大会の共催、MLAJ1988 広島国際会議 (漢字文化圏の音楽資料とそのコンピュータ処理) の主催等に繋がっていきました。

音楽ライブラリアンの視野を世界に向けさせると同時に我が国の明治期以降の音楽資料の収集と保存の重要性に気づかせてくれたのも遠山先生です。それまでも遠山音楽図書館では山田耕筰文庫等の洋楽関係コレクションを収蔵し、また、遠山現代音楽研究所を設置して日本人作曲家の自筆譜のマイクロ化を進めていました。1974 年には中島健蔵、諸井三郎、中山卯郎氏らによる日本洋楽資料収集連絡協議会の活動も始まっていました。また、MLAJ 加盟館の中にも、民音音楽資料館の明治期以降刊行の洋楽関係図書、フェリス学院大学山手図書館別館の讃美歌資料など明治期以降の音楽資料の収集と保存に積極的な取り組みが行われました。1982 年 7 月 17 日の MLAJ 総会では、その年度の活動計画として「近代音楽館 (仮称)」設立に向けた幅広い活動を展開することが挙げられました。1983 年 5 月の長期研修会の最終回では遠山先生が「近代音楽館の実現にむけて」と題して講演されました。

私は、財団法人遠山借成から助成を受けて、1983 年にカナダのトロントを中心に北米の図書館コンソーシアムの調査と米加両国の国内音楽資料のアーカイブ化について調査研究を行いました。我が国における洋楽資料のアーカイブ構築が中心テーマでした。

帰国後 (どういう成り行きだったのかい

まだに分かりませんが)、朝日新聞立川支局の記者が訪ねてきました。いろいろと雑談をするうち、近代音楽館構想という大風呂敷を拵げたところ、それが、あれよあれよという間に3月10日の朝日新聞朝刊社会面のトップ記事となり、さらに、3月24日には「ひと」欄で紹介され、もう後には引かれぬ状況となりました。そこで、遠山先生にご相談し、国立音楽大学海老澤敏学長のご了解を得て、国立音楽大学附属図書館の中に「近代音楽館を設立する会（仮称）」の事務局を立ち上げ、1984年10月20日に「近代音楽館を設立する会」が正式に発足したのです。この後、私は国立音楽大学附属図書館の主任司書、MLAJの事務局長、近代音楽館を設立する会の事務局長の立場で三つの機関の活動を相互に連動調整しながら活動しました。

1986年7月24日、遠山音楽財団の財団法人日本近代音楽財団への名称変更と改組が文化庁から認可され、1987年10月1日、日本近代音楽館本館（西麻布）、分室（上野公園・旧東京音楽学校奏楽堂内）が開館したのでした。

2011年5月、日本近代音楽館は明治学院大学に移管され、図書館の附属機関として公開されました。この数年前から移管先を探すよう遠山先生から密命を受けていました。遠方のふたつの機関が興味を示し、誘致活動を始めようとしていました。しかし、先生は近代音楽館が明治以降の近代洋楽史の音楽文化財の集積として単に展示されるだけではなく、近代洋楽史の調査研究とその分野の発展のために役立てることを最優先にされた。遠山先生のこの信念は首尾一貫、決して揺るぎませんでした。

（元音楽図書館協議会事務局長）

遠山邸

岸本 宏子

IAML日本支部長としての遠山先生ご自身との直接の接触はあまりなかった。しかし、遠山音楽図書館（現日本近代音楽館）の選書の役割を担った時代があった。毎週1ないし2回出勤して各種のカタログ等に目を通し、購入すべき資料を選ぶという仕事であった。同時に、アメリカ留学で学んだ「書誌学 Bibliography」の知識を館員に伝授することも依頼された。

そうした立場上、時には遠山・皆川・平島の三先生を中心とした会議で指示を受けたり意見を述べたりする機会があった。そのうち、選書・書誌学以外に、IAML関係での関係の事柄も非公式にお手伝いする機会が生まれることになった。各国支部と本部とのかわりについての説明を求められたり、1980年のケンブリッジ大会では、本部の方々にお引き合わせしたり、遠山音楽図書館をIAMIC（International Association of Music Information Centres）の日本代表として認可してもらうことに協力したり、現日本近代音楽館の命名に当たって、遠山音楽図書館からの依頼によりIAML本部の幹部の意見を集めたり、1988年東京会議に際して、日本支部の依頼により、先立つ2回の国際会議に出席して本部との調整を担当したり・・・。

遠山先生とは師弟関係もなかったのであるが、そのほかにもご縁があり（私からの一方的なご縁であるが）、懐かしさがある。懐かしい大きな理由は、遠山先生のご自宅と私が育った場所が重なる地域だったことにある。私が知っている2つの遠山邸の場所は、渋谷区羽沢町、ついで港区高樹町（西麻布）な

のであるが、これは幼児時代（終戦直後）から 30 才代中頃までの私の住処と重なっている。昭和 22 年から通った若葉会幼稚園と同 25 年から通った東京女学館とは、現遠山邸からは反対方向に数百メートルずつの位置にある。私が暮らしたのは東京女学館の敷地内、あるいは隣接する場所であった。都電の高樹町から広尾の臨川小学校あたりの日赤通りが私のテリトリーであり、日赤通りに沿って幼稚園時代以来の友達の家が、10 軒ほどがあったと思う。

大学 3 年の時、私は卒論の指導を皆川達夫先生にお願いした。快く引き受けて下さった先生は、いろいろなアドバイスを下さり、読むべき書籍名を挙げ、カードを作る指導をして下さった。その部屋の一角には書棚があり、書籍が並べられていた。その場所（羽沢）が旧遠山邸、遠山音楽財団発祥の場、財団設立の 2 年ほど後だったことは後で知った。旧遠山邸は、私も団員であった皆川先生の中世音楽合唱団の練習の場でもあった。

その後私は大学院に進み、修士課程修了後にアメリカに留学した。留学に際して皆川先生からある住所を伝えられ、「ここに行きなさい。留学補助金（奨学金）がもらえることになっているから」と。よく理解したわけではなかったが、指示通りにその場を訪れると、確かに奨学金が用意されていた。署名捺印して有り難く頂戴してきた。どうやらこれは設立から 2、3 年目の遠山音楽財団から贈られたものであったらしい。世間知らずのぼんやり者は、確かめることをしなかった。

留学を終えて帰国すると、前述のように「遠山音楽図書館の選書係」という仕事を頂いた。芸大楽理科の助手をする傍ら「遠山音楽図書館の選書係」となった私は、何年か後に、音楽資料を軸とした図書館学を学ぶために再渡米することにした。村井範子氏とともに、慶

応大学図書館学科の濱田主任教授に任意団体（IAML 日本支部）設立の仕方を教えていただき、僅かではあるが資金を出し合った。村井先生と IAML 日本支部設立を宣言した私は、本格的な IAML 日本支部の組織化は同志に託し、自身は IAML 日本支部の活動に必要な知識と経験、本部との連携を築くべく再渡米した。出発前には、遠山先生はじめ海老沢先生、福島先生ほか賛同者の錚々たる先生方が、壮行会を開いて下さった。

この再留学の際に 2 度目の奨学金を頂く事になり、指示された住所に受け取りに行くと、なんと、何年か前に訪れたのと同じ場所ではないか。遠山先生から、2 回の奨学金を頂くという、例外的な扱いをいただいたことを始めて知ったのである。

余計な付け足しではあるが、1967 年、遠山先生が江藤淳・高階秀爾両氏と共に出版された『季刊藝術』の発刊号を、高階秀爾氏の母上が、高樹町に住まう私の祖父の手元に届けて下さった。祖父が、高階氏の母上の母校の校長だったからか、あるいは東京美術学校（現東京芸術大学美術学部）の校長だったことがあったからか、真相不明ではあるが、これも私にとっては驚く偶然であり、祖父の家の棚にある『季刊藝術』発刊号を取り出しては眺めたものである。

とりとめもなく、遠山先生と遠山音楽図書館や IAML 日本支部に関わる、ごく個人的かつ一方的な思い出を綴ってみた。幅広い分野での活躍をされた遠山先生ではあったが、音楽、遠山音楽図書館、IAML 日本支部という繋がり、そして懐かしい場所という繋がりを通して、一方的ではあるが、遠山先生と長い繋がりを持てたことに感謝している。

（昭和音楽大学教授）

IAML と郷土音楽資料館 ～日本近代音楽館～

平尾 行蔵

ケンブリッジの空は晴れ渡っていた。58歳になられたばかりの遠山一行先生は、University Music Schoolの前に、颯爽と長身の姿をあらわされた。その年、1980年のIAMLの大会はイギリスの大学都市ケンブリッジで開かれ、遠山音楽財団附属図書館遠山一行館長は、前年に創設された日本支部の初代支部長としてはじめてIAMLの会議に参加された（前々年から音楽図書館協議会理事長）。私がご一緒する栄に浴したの、遠山音楽財団から海外研修の機会を与えられ、たまたまその年7月から滞独中であり気軽にイギリスへ飛ぶことができたからである。会期はいまと同じ程度で、運営サイドの会合といくつもの分科会に別れていて、先生と私が参加する会合は自ずと別になった。私は目録規則等の図書館実務にかかわる分科会に出て、先生とともに参加したのは、会議最終日の、全員が一堂に会する晩餐会である。

IAMLは、欧米の「音楽図書館」で働く管理職層の人々によって第二次世界大戦後の混乱期のあと直ぐに創設され、1950年代半ばから、自国内でのみ通用する規則に代え欧米で共通して使用可能な楽譜目録規則作りに着手し、戦災によって所在変更・所在不明となった楽譜等音楽資料の所在目録RISMを次々に編纂し、研究成果の世界的情報伝達と入手のために音楽書誌・音楽雑誌記事索引RILMを刊行する等の、音楽学研究の基礎情報作りを活発に展開していた。

遠山先生は、1951年11月から1957年8月まで、途中一年間の中断を挟んで五年間パ



ケンブリッジにて（1980）
岸本宏子、村井範子、筆者とともに

リを中心としてヨーロッパに滞在された。ブリオテク・ナショナルの音楽部門をはじめとする図書館のあり方の、日本との違いをこの時期に痛感されたことと思われる。

ヨーロッパの音楽図書館は、一言でいうと郷土音楽資料館である。各国、各地の国公立図書館には（法律部門、地図部門、貴重資料部門等と並んで）必ずといっていいほど音楽部門が設けられていて、その土地の音楽資料が保存されている。いちいち名前は挙げないが西洋音楽史上の名だたる作曲家の自筆譜等の資料は、それぞれに相応しい所を得て、つまり縁の土地の音楽図書館に保存され研究に供されている。1950年代はじめにヨーロッパに行かれた遠山先生は、日本国内には音楽分野にそういう保存・研究施設が存在しないということにすぐに気づかれたと思われる。それは帰国されてから五年後、遠山音楽財団の創設に至る。そして皆川達夫、平島正郎両先生の協力を仰いで音楽学・音楽史学の基礎資料（ヨーロッパ諸言語による音楽事典・辞書・主題作品目録等の参考文献、西洋中世・ルネサンス期の大部のシリーズ叢書楽譜・作曲家の個人全集等）の収集を始め、4年後に附属図書室（渋谷区広尾）を、1969

年には附属図書館（港区西麻布）を開設された。しかるのち、満を持して開始されたのが、1970年からの、西洋音楽の手法による日本人作曲家の自筆譜等のマイクロフィルムによる保存事業である（その事業を国庫補助を受けて行うために遠山現代音楽研究所を併設するという手続きが必要だった）。音楽批評家の遠山先生は、すでに郷土音楽となった洋楽資料の保存・研究施設がないという状況を打破するため、私財を抛って郷土音楽資料館を創られたのである。それは、第二次世界大戦後ヨーロッパに渡った多くの音楽研究者や作曲家の誰にも真似のできないことであった。

IAML は世界各地に存在する郷土音楽資料館の横の連絡組織として、点を線にする働きをしている。1980年という、加盟団体の増加、楽譜だけでなく音声や画像情報の作成、また音楽図書館員教育等の様々な新しい展開があり、国際図書館協会連合 IFLA との協力活動も始まり、一方で創設後 30 年を経て世代交替が進みつつあった。

前段階として遠山音楽図書館を設けられた後、遠山先生が本来の目的とされた日本近代音楽館を設立されたのは、個人財団の創設から数えて四半世紀を経た 1987 年のことだった。それに先立ち 1985 年には、組織目的をより一層明確にするため、それまでに収集された西洋音楽の資料を分離・移管された（移管先は慶應義塾大学三田情報センター。現同大学三田メディアセンター内遠山音楽文庫。私事ながらその移管に際し筆者は慶應義塾大学に移籍した）。

日本近代音楽館は、設立からさらに四半世紀を経て遠山先生の手を離れ、私立大学の一部門となってしかし郷土音楽資料館という設立目的を維持しながら、二十一世紀に生き続けようとしている。

（元慶應義塾大学メディアセンター本部事務長）

遠山一行記念日本近代音楽館

樋口 隆一

遠山一行先生が亡くなられてから、はや 1 年が経過しようとしている。ご高齢であったから、ある程度覚悟はしていたものの、訃報を聞いたときはまさに「巨星墜つ」の感慨が全身を貫いた。

遠山先生は IAML 日本支部の設立に尽力され、初代支部長を 16 年も務められたという。その頃の事情については、当時、事務局長として遠山先生を支えてこられた村井範子先生が詳しくお書きになることだろう。とはいえ、私がかかなり早くから IAML の会員になっていたのは村井先生のお薦めだったから、間接的には遠山先生の恩恵に浴したことになる。なによりも、1988 年に東京芸術大学を会場に開催された東京大会では、若手会員としてたいへん楽しい思いをした記憶がある。現在、その姉妹団体である国際音楽学会 IMS の副会長として、2017 年東京大会の準備に邁進しているのも、あのときの体験が背景になっていると言っても過言ではない。IMS 前会長のティルマン・ゼーバス（オーストリア）、もうひとりの副会長のマレーナ・クス（USA）も IAML 東京大会の参加者であり、すでに伝説となっている日本のオーガニゼーションのすばらしさが、IMS 東京大会決定の大きな要因となっていることも付け加えておきたい。

日本の音楽研究の基礎作りに対する遠山先生の最大の業績は、遠山音楽財団附属図書館と、その発展としての日本近代音楽館の創設と運営にある。1951～57 年、パリに留学された遠山先生は、コルトーやフルトヴェングラーの名演に接して、音楽評論の確固たる座標軸を身につけられただけでなく、パリ大

学ではノルベール・デュブルク、パリ音楽院ではジャック・シャイエという当代きっての音楽学者のもとでも学ばれ、音楽史の根幹である資料の保存と、音楽研究の専門図書館の重要性を痛感された。そこで帰国された後、遠山音楽財団を設立され、広尾に附属図書室を開設されたのは1966年のことだった。

その頃、私は慶應義塾大学文学部の学生で、中野博司先生のもとで音楽学の研究を志していた。しかし当時の総合大学では音楽学の専門文献はほとんど無きに等しく、副室長だった皆川達夫先生のご紹介で、同級生の美山良夫君と一緒に広尾の遠山音楽財団附属図書室で勉強を始めたのだった。

1969年、同図書室は図書館と改め、西麻布の旧遠山邸に移転したが、レファランス関係の資料が充実していた同図書館が、私の音楽研究の基礎を作ってくれたのは言うまでもない。その後、1972年にはライブツィヒのバッハ・アルヒーフに研究滞在、1974～79年にはドイツ学術交流会 DAAD の奨学生としてチュービンゲン大学に留学し、ドイツ音楽学会最大のプロジェクトもいうべき『新バッハ全集 Neue Bach-Ausgabe』の客員研究員となり、教会カンタータ7曲を取めた Serie I Band 34 の校訂を任されることになった。思い返せば、チュービンゲンのみならず、ベルリン、ライブツィヒ、ゲッティンゲン、ニューヨークの研究所や図書館に出向いても、すぐに第一線の仕事ができたのは、遠山音楽図書館で培った音楽研究の基礎があったことだった。あの時代の東京にこうした研究環境を整えてくださった館長の遠山一行先生、副館長の皆川達夫先生、平島正郎先生の慧眼と学恩に感謝する次第である。

1986年、遠山音楽財団は日本近代音楽財団へと改組し、翌87年、日本近代音楽館（館長・遠山一行、副館長・皆川達夫）が開館、

89年には麻布台に移転し、日本近代音楽資料の本格的な収集事業が始まった。かつて図書館が所蔵していた西洋音楽関係の資料は、1985年に学校法人慶應義塾に寄贈され、三田の慶應義塾大学図書館旧館に「遠山音楽文庫」が開設されていた。財団の改称とともに、基本的に日本近代音楽の資料が収集の中心をなすこととなったからである。こうした仕事の運営は本来、日本の社会全体が担うべきことだが、残念ながらわが国にはそうした風土は脆弱であり、結果的に遠山先生が私財を擲って支えてこられた。日本の音楽界はそのことをきちんと認識し、先生への感謝の気持ちを忘れてはならない。

21世紀に入ると、音楽館が所蔵する日本人作曲家のコレクションは100を超え始め、将来の永続的な活動を考えると、すでに私的財団の能力を超えつつあった。お元気ではあったものの、遠山先生も80歳代となられ、事業の継続を保証すべき新しい受け皿を探し始められた。しかし、2009年の時点で、50万点を超える資料と128の作曲家・音楽家のコレクションをそのまま受け入れられる機関は、なかなか見つからなかったようだ。

遠山先生と皆川先生から、明治学院大学で受け入れてくれないかというありがたいお話を頂いたのは、たしかその頃のことだったと思う。すでに述べたように、遠山音楽図書館とその発展である日本近代音楽館の歴史は、私自身の音楽研究者としての歴史とも重なっており、そのご恩を考えると、なんとかその移管事業を成功させたいと願わずにはいられなかった。

つらつら考えると、1863年にヘボン博士によって創立されたヘボン英学塾に端を発する明治学院大学は、2013年には創立150周年を迎えようとしていた。日本近代音楽の歴史もまた、ヘボン博士やブラウン牧師らに

よって幕末に横浜で歌い始められた讃美歌の歴史に端を発するものである。そこで私は、「創立 150 周年」を祝うべき事業の一環として、この価値ある資料を継承しようと、各方面の説得に回った。幸いなことにその論法は当時の学院長、学長、図書館長、さらには理事会の理解を得られ、2010 年 8 月には全資料が明治学院大学図書館に移送された。新装なった明治学院大学図書館附属日本近代音楽館が開館したのは、2011 年 5 月のことであった。後日、大学は遠山先生の業績を称えるために名誉博士号を差し上げたわけだが、プロテスタントの信者であられた遠山先生も、オルガン前奏に始まるチャペルでの礼拝形式による授与式をことのほか喜んで下さった。

2013 年秋には東京オペラシティアーアートギャラリーを会場に、「五線紙に描いた夢 - 日本近代音楽の 150 年」を開催することができたが、そのときすでに先生は病床に伏せられており、直接見ていただけなかったのは残念であった。しかし先生ご夫妻ともお親しい皇后陛下美智子様之行啓もあり、日本近代音楽資料収集の重要性を広く全国に発信できたことは感慨深い。

本年、明治学院大学は、先生の一周忌を迎えるにあたり、日本近代音楽館に「遠山一行記念」の冠を付与することを決定した。先生の業績を永く後世に伝えるべき正しい判断だと確信している。

(明治学院大学名誉教授・国際音楽学会副会長)

遠山先生と音楽資料館

林 淑 姫

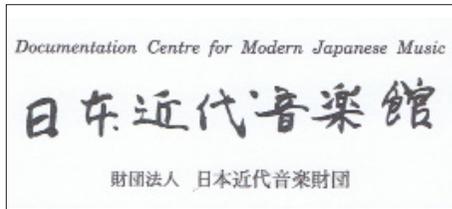
遠山一行先生はやさしくて穏やかな、端正そのもののお人柄でいらっしゃるのに、意外にもせっかち風なところがあって、館の相談事を抱えてお宅に伺うといつも階段を駆け下りていらっしゃる。いつだったか外の会議のお供で先生の運転する車に乗せていただいたことがあるが、さほどの距離でもなく時刻が迫っているわけでもないのに、結構なスピードで首都高を走り抜ける。このどこかせっかちな気風は親しいご友人の二人の副館長平島正郎、皆川達夫両先生にも共通していたので、遠山音楽図書館の定例会議での報告はとりわけ「簡にして要」が旨とされていた。もたついていると遠山先生はネクタイを丸め始め、平島先生は困惑気味に俯き、皆川先生は明かにいつ終わるのかなという表情をなさるのだ。

その先生方が館員を交えて辛抱強く論議されたのは『山田耕筰作品資料目録』の編集方針をめぐってのことだった。山田耕筰文庫の本格的な整理が開始されたのは 1975 年秋のことで、館員は新田紘雄さん、平尾行藏さん、それに、その年の春就職された後藤暢子さんと直前にアメリカから戻って入れていただいたばかりの私。今思うと汗顔ものだが、当初は山田耕筰や当時の音楽状況についてほとんど無知だったから、山田耕筰の器楽作品に新鮮な驚きを覚え、明治以降の音楽の複雑な諸相にびっくりし、音楽資料の多様さとそれらの整理に一般的な図書館の目録法が通用しないことにまた驚く、ということの連続だった。それでも一応の資料整理を終え『目録』を編集する段階に至って事態は紛糾した。意見の相違をおおまかに言えば、館員の主張は「所

蔵資料」の公表であり、収録単位は物理的資料単位。先生方の主張は、館外資料の調査及び確認の上でそれらを複写資料として収録、かつ作品単位、というものである。侃々諤々の議論の末、先生方に説得された形で計画を練り直し、新たな調査結果を加えて編集された『目録』の刊行は、当初の予定を大幅に上回り、1984年秋のことになった。

山田耕筰文庫の整理と『目録』の編集は、それまでの音楽専門の学術図書館・遠山音楽図書館の存在軸を転回させたようにおもう。「図書館」から記録情報とその処理をも扱う研究的資料館「ドキュメンテーション・センター」への転回である。議論がかみ合わなかったのは視線の先に見ているものが異なっていたからで、最初に兜を脱いで隊列を乱したのは私だったように記憶する。遠山先生が示されたこのときの「ドキュメンテーション・センター」の発想と経験がその後の「日本近代音楽館」の性格をゆるやかに形成することになった。

遠山先生は「待つ」ことの意味をとてもよく御存じの方だったとおもう。その時が必ず訪れることを予知している人だけが持つ「気長」さで待つ。1969年に財団附属図書室を図書館と名称を改めて開設されたとき、先生は「山田耕筰文庫」の設置を報告し、将来の「近代音楽館」の下地でもある、と書かれた。背景には2年前から開館していた「日本近代文学館」の活動もあっただろう。それからおよそ20年、先生は待たれた。その間に日本人作曲家の自筆譜をマイクロフィルムに収録するという事業も始められていたが、80年代に入り、芥川也寸志、黛敏郎氏を中心とする「奏楽堂を救う会」の運動が人々の関心を明治以降の音楽に向けさせたとき、先生はこの運動と連動する形で、当時理事長を務めていた音楽図書館協議会の力もかりて一気に「近代音楽館を設立する会」を結成し、楽界



旧日本近代音楽館館報題号 題字・遠山一行

総意のもとに「日本近代音楽館」を創設するべく運動を起された。近代日本の音楽的遺産を正しく残すためには社会的な共通理解が必須とお考えになっていたからだとおもう。発起人400名余を擁して展開されたこの運動は、結果として新たな財団を設立するための財政的基盤を作るに至らず、先生がその全てを負うことになったのだが、それでも「運動」の意義は決して小さくはなかった筈である。

いうまでもなく、遠山先生のお仕事はどれも批評家（クリティーク）としてのそれである。文筆のお仕事はもちろんだが、近代音楽館も草津のフェスティバルもいずれも先生の批評精神の一環としてある。それはヴァレリーの「批評」にも似て、時代の精神の深奥に向けられた眼差しの先にある。私は読者として先生の批評の根底に流れている、音楽批評が言語として表出される以上極めなければならない「批評の自律性」、批評とは「聴衆であろうとする努力である」という素樸ともいえる姿勢、対象との距離（「他者性」）に重心をかけ、丹念に読み解いてゆくプロセスに批評の成立をみる立場、に惹かれる。先生独自の批評論だとおもう。60歳代の末に書かれた『河上徹太郎私論』は先生のことを考えるとき決まって持ち出してくる書物のひとつだが、文中に引用されている小林秀雄の「対象をダシにして己れを語る」でもなく、河上徹太郎の「己れをダシにして対象を語る」でもない独自の世界がそこにある。誤解を恐れず、理知が包む人間学的批評と言おうか。



日本近代音楽館新館披露パーティにて
作曲家戸田邦雄氏と (1989.7.4)

日本近代音楽館は、1987 年秋に開館してからおよそ四半世紀の間に急成長を遂げ、作曲家文庫を主体とするコレクション 120、蔵書 50 万を抱えた。山田耕筰、橋本國彦、清瀬保二、武満徹、三善晃を先頭にして並ぶ作曲家文庫は明治以降の日本の作曲史をそのまま語り、大田黒元雄、富樫康、秋山邦晴を中心とする評論家の文庫は音楽史を読み解くための貴重な文献の集積でもある。そのいずれも遠山先生に対する厚い信頼の上に寄せられた。お申し入れのときの窓口だった私にはそれがとてもよくわかる。「遠山さんの資料館」にお任せしたい、電話の向こうの声はいつもそう言っていた。

懸案だった近代音楽館の将来を明治学院に託すことが叶ったとき、遠山先生は本当に喜ばれ、安堵もされていた。明治学院の理解と熱意に加えて、旧館員の森本美恵子さん、末永理恵子さんがスタッフに加わったことも安心材料のひとつであったに違いない。

遠山一行先生はお人柄も見識も別格の方だった。その先生のもとで長く仕事を続けさせていただけたことの幸せをつくづくおもう。

長い間本当にありがとうございました。

(旧日本近代音楽館主任司書)

遠山一行先生年譜・著書一覧

1922 年 (大正 11)

7 月 4 日 東京に生れる

1942 年 (昭和 17) 20 歳

旧制府立高等学校卒業。東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学

1943 年 (昭和 18) 21 歳

学徒出陣により入隊。45 年復員

1946 年 (昭和 21) 24 歳

東京大学大学院に進学。『音楽芸術』『音楽之友』に寄稿。『毎日新聞』に演奏批評を執筆、音楽批評家としての道を歩み始める

1948 年 (昭和 23) 26 歳

慶應義塾高等学校、「子供のための音楽教室」で教鞭をとる

1949 年 (昭和 24) 27 歳

東京藝術大学音楽学部講師 (52 年退任)、横浜山手女学院専門学校 (現フェリス女学院大学) 音楽科助教授 (57 年退任)

1951 年 (昭和 26) 29 歳

渡仏。パリ大学およびパリ国立高等音楽院に学ぶ (57 年帰国)

1958 年 (昭和 33) 36 歳

『読売新聞』音楽時評欄を担当 (61 年迄) 桐朋学園短期大学音楽科 (のち桐朋学園大学音楽学部) 教授 (74 年退任)

1959 年 (昭和 34) 37 歳

『朝日ジャーナル』音楽欄を担当 (69 年迄)

1962 年 (昭和 37) 40 歳

財団法人遠山音楽財団創設

1965 年 (昭和 40) 43 歳

『毎日新聞』音楽時評欄を担当 (92 年迄)

1966 年 (昭和 41) 44 歳

遠山音楽財団附属図書室開設 (所在地・東京都渋谷区広尾 2 丁目)

1967 年 (昭和 42) 45 歳

第一評論集『名曲のたのしみ』刊行。『季刊藝術』

創刊(79年夏号以降休刊 89年臨時増刊号刊行)
 68年、財団附属図書室に「山田耕柝文庫」設置
 1969年(昭和34) 47歳
 遠山音楽財団附属図書室を附属図書館(遠山音楽
 図書館)と改称、港区西麻布4丁目(旧宅)に移転
 1970年(昭和45) 48歳
 遠山現代音楽研究所を設置、日本人作曲家自筆
 譜のマイクロフィルム収録を開始
 1972年(昭和47) 50歳
 財団法人偕成会、同遠山記念館理事長に就任
 (2012年退任)
 1976年(昭和51) 54歳
 著書『ショパン』刊行(77年、毎日芸術賞受賞)
 1978年(昭和53) 56歳
 音楽図書館協議会理事長に就任(85年退任)
 1979年(昭和54) 57歳
 IAML(国際音楽文献学協会、のち国際音楽資料情
 報協会)日本支部設立、支部長に就任(95年退任)
 1980年(昭和55) 58歳
 草津夏期国際音楽アカデミー(のち草津夏期国
 際音楽アカデミー&フェスティバル)創設
 IAML国際会議(ケンブリッジ)に日本支部長
 として参加。フランス政府より文芸勲章オフィ
 シエ章授章
 1981年(昭和56) 59歳
 日本音楽コンクール運営委員長(95年退任)
 「日本キリスト教芸術センター」設立(2002年解散)
 1983年(昭和58) 61歳
 著書『古典と幻想 音楽におけるマネエリスム』刊
 行。東京文化会館館長に就任(96年退任)
 1984年(昭和59) 62歳
 楽界有志とともに「近代音楽館を設立する会」
 を結成、運営委員長を務め、「日本近代音楽資
 料センター」の構想に基づく運動をおこす
 1985年(昭和60) 63歳
 附属図書館蔵書の一部(西洋音楽関係資料)を学
 校法人慶應義塾に寄贈(「遠山音楽文庫」開設)
 『山田耕柝作品資料目録』編纂(84年刊行)によ

り、中島健蔵音楽賞受賞。紫綬褒章受章

1986年(昭和61) 64歳

『遠山一行著作集』全6巻刊行(87年完結
 京都音楽賞受賞)。遠山音楽財団を財団法人日
 本近代音楽財団に改組

1987(昭和62) 65歳

財団法人日本近代音楽財団日本近代音楽館創立
 (所在地・港区西麻布4丁目。89年麻布台1丁目
 に移転)

1988年(昭和63) 66歳

IAML東京会議開催、実行委員長を務める

1991年(平成3) 69歳

第二国立劇場開設準備推進会議会長、東京芸術
 劇場館長に就任(93年退任)

1992年(平成4) 70歳

著書『河上徹太郎私論』刊行

1993年(平成5) 71歳

第二国立劇場運営財団副理事長に就任(99年
 退任)。勲三等旭日中綬章受章

1994年(平成6) 73歳

桐朋学園大学学長に就任(96年退任)。日本近
 代音楽館、音楽之友社賞受賞

1996年(平成8) 74歳

著書『「辺境」の音 ストラヴィンスキーと武
 満徹』刊行

1998年(平成10) 76歳

文化功労者に選ばれる。IAML日本支部名誉会員

1999年(平成11) 77歳

著書『マチスについての手紙』刊行

2006年(平成18) 84歳

著書『モーツァルトをめぐる十二章』刊行

2010年(平成22) 88歳

日本近代音楽館蔵書を学校法人明治学院に移管
 (11年、同大学図書館付属日本近代音楽館開設)

2011年(平成23) 89歳

脳梗塞を発症。療養生活に入る

2014年(平成26) 92歳

12月10日 永眠

【著書】

『遠山一行著作集』全六巻（新潮社 1986-87）
 『名曲のたのしみ』（新潮社 1967）『音楽＝ヨーロッパ＝東京』（音楽之友社 1968）『現代と音楽』（講談社 1972）『音楽有愁』（音楽之友社 1976）『ショパン』（新潮社 1976 講談社学術文庫 1991）『音楽とともに』（小沢書店 1981）『古典と幻想 音楽におけるマネリスム』（青土社 1983）『ヨーロッパ近代クラシック音楽史 ロマン派のはじまりとその終焉』（東京音楽社 1984、ショパン 1995）
 『ショパン』（新潮文庫「カラー版作曲家の生涯」（1988）『考える耳考える目』（青土社 1990）
 『河上徹太郎私論』（新潮社 1992）『私の音楽批評』（小沢書店 1993）『日付のある批評 1992~94（東京日記）』（音楽之友社 1995）
 『「辺境」の音 ストラヴィンスキーと武満徹』（音楽之友社 1996）『私の音楽手帖』（講談社 1996）『猫好きの話 西麻布雑記』（小沢書店 1996）『マチスについての手紙』（新潮社 1999）『いまの音むかしの音』（講談社 2000）
 『芸術随想』（彌生書房 2003）『モーツァルトをめぐる十二章』（春秋社 2006）『語られた自叙伝』（長谷川都夫編 作品社 2015）

【訳書】

R. レイボヴィッツ『現代音楽への道』（共訳 ダヴィッド社 1956）『レヴィ＝ストロースの世界』（共訳 みすず書房 1968）R. ショアン『ストラヴィンスキー』（白水社 1969）J. C. ピゲ『アンセルメとの対話』（共訳 みすず書房 1970）P. シトロン『クープラン』（白水社 1970）N. デュフルク『フランス音楽史』（共訳 白水社 1972 復刊 2009）E. ラトケ『ドイツ表現主義（現代の絵画 12）』（平凡社 1974）B. ガヴォティ『アルレッド・コルトー』（共訳 白水社 1982 復刊 2012）

【編纂・監修】

『ワグナー変貌』（1967）、『芸術と思想』（1969）、

『山田耕筰作品資料目録』（1984）、『ピアノによせて（音楽の森・名随筆選 2）』（1989）、『名曲（日本の名随筆 別巻 13）』（1992）、『山田耕筰著作全集』（2001）等の編纂、『ラールス世界音楽事典』『ラールス世界音楽人名事典』『ラールス世界音楽作品事典』（日本語版 1989）『ニューグローヴ世界音楽大事典』（日本語版 1991-95）等の監修

（林淑姫編）

【編集後記】

昨年 12 月 10 日に他界された IAML 日本支部初代支部長・名誉会員遠山一行先生の追悼文集をお届け致します。巻頭のご執筆は青年時代からの親しい御友人で、ともに音楽資料館の育成にあられた皆川達夫先生にお願いしました。ほかはすべて支部会員（旧会員を含む）です。「年譜」は多岐にわたるご活動のうち、特に音楽資料関連の事項に留意して作成しました。

謹んでご冥福をお祈り致します。（編集部）

☆☆☆

【事務局より】

2016 年度会費の納入を本年 12 月末日までにお願致します。また住所、所属等の変更は郵送またはメールで下記までお知らせください。

◎郵送・〒 171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5

東京音楽大学付属図書館内

IAML 日本支部事務局・名簿係

◎e メール・yokogrp@gmail.com

Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部
第 55 号

2015 年 12 月 10 日発行
 国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部
 〒 171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5
 東京音楽大学付属図書館内
<http://www.iaml.jp>